

Title	遲子建、覚え書き：北極村から北極村へ
Sub Title	Note of Chi Zijian : from Beiji cun to Beiji cun
Author	竹内, 良雄(Takeuchi, Yoshio)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2008
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. 中国研究 (The Hiyoshi review of Chinese studies). No.1 (2008. 3) ,p.89- 103
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA12310306-20080331-0089

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

遲子建、覚え書き——北極村から北極村へ

竹内良雄

当代の作家遲子建の作品は、小説にしろ散文にしろ、大上段に振るかぶって思想を論じたり、政治を論じたり、経済を論じたりすることもしない。遲子建が相手にするのは、中国の最北端ともいうべき大興安嶺の自然とその中で生きる人間である。

また、文革後排出した作家たちのさまざまな文学潮流とはいわば無関係な位置で、遲子建は作品を書き続けてきた。むろん同時代の世界文学、中国文学から影響を受けなかったわけではない。数多くの作品を読破してきたことは遲子建自身語っていて、影響を受けないはずがない。しかし遲子建は自分の文学世界を樹立してきた。遲子建の作品から、また遲子建の生きてきた軌跡を追いながら、彼女のこの樹立への過程を見ていきたい。

遅子建は一九六四年二月二十七日に黒龍江省漠河県の北極村で生まれた。

北極村は中国の北の果てともいふべき五十三度三十三分三十という緯度にあり、これはヨーロッパ大陸ではドイツ北部の経済の中心都市であるハンブルグとほぼ同じであるが、暖流が近くを流れるヨーロッパ大陸と違い、北極村の寒さは厳しい。冬はマイナス三、四十度になるといふ極寒の地である。中国最北端の村で、黒竜江河畔にあり、対岸はロシアの領土である。

北極村には母の実家があり、ここで生まれたということは、おそらく母は出産のために実家へ戻っていたからであらう。またこの年の二月二十七日は元宵節（旧暦一月十五日）にあたり、彼女の略歴などでは一九六四年の元宵節に生まれたとしている。その後、誕生日はその年の元宵節に祝っているといっているから、陰暦で生活をする農民の生活習慣を遵守しているともいえるし、元宵節という節句に生まれたという目出度さも加わっているのかもしれない。余談になるが、母は東北作家の蕭紅と同じ端午節に生まれたという。⁽¹⁾

父は小学校の校長、母は専業主婦で、子供は三人。遅子建は次女で、姉と弟がいる。父が子建と名をつけたが、父は「洛神賦」を作った曹子建（曹植）が大好きで、かれの名をとってつけた。⁽²⁾

子建と名付けられた彼女は、六歳のとき、ひとりで母の実家に預けられる。理由は定かでない。ただ『遅子建影記』⁽³⁾あるいは「原始風景」⁽⁴⁾で、彼女が推察しているには、母の妹には子供がなく、遅子建を養女にしたかったからではないかとしている。しかしいずれにせよ子供の遅子建にとっては、親から見放された感が強かったにちがいない。

ない。「北極村童話」⁽⁵⁾にこのときの経験が語られている。

汽船が汽笛を鳴らした。錨をあげた。船体がゆっくりと動き出した。

母が行ってしまう。姉も弟もだ。私は本当に泣きたかった。お母さんは本当にひどい、私をひとりここに置いてくなんて。母は甲板で私に向かって手を振り、さらにたびたび腕を上げて目をこすっている。泣いているんだ。

私を置きざりにして、行こうとしているのに、心配しているの？ なんていうこと。私は母を見たいと思わないし、ましてや手なんか振りたくない。行けばいいんだわ。

ひどい母、私は恨むわ！

むろん虚構の文学作品から取り出したことばがすべてその作家の真実の姿を伝えているとはいえないのはいうまでもないだろう。ただ、この場面は少なくとも事実に近い。母が姉と弟を連れてお祖母さんの家から帰っていくが、そのとき自分だけが残るように言われたら、どんな気持ちになるか、間違いなく引用した文章に表れている感情が支配するのは想像できよう。

ところでこの出来事が遅子建にとって大きな意味を持つ。すなわち祖母に兄弟のなかで預けられたのは彼女だけだ。なぜ自分だけがという思いがあつたのだろう。母親から愛情をかけられていないのではないかという自分という存在に、彼女は母親の方へ向けるべき愛情を閉ざすほかない。そして、その愛情は、そんな彼女をやさしく世話してくれる祖母と眼前に大きく広がる自然界で生き生きとして生きる動物、植物に向けられたとしてもおかしくな

いであろう。

両親の家もたとえ塔河の永安という町にあったとはいえ、そのすぐ周りは大興安嶺の大自然が迫っている。自然界で生きる動物、植物にこと欠かなかったはずだ。だが両親、兄弟のいない北極村ではそれ以上に大きな意味を持ったに違いない。

私は小さい頃母方の祖母の家に住んだ。丸木作りの高く大きな家で、家の前後に広々とした野菜畑があった。短い夏がやって来ると、野菜畑には様々な色の作物と花と草が植えられており、食用のものは、たとえばキウリ、ナス、カボチャ、インゲン豆、トウモロコシなどだ。純粹に観賞用のは、たとえば、ヤグルマ草、ツタ、ケシなどだ。もちろん、ヒマワリのように、食用と観賞が半々の植物もあった。

遅子建はこの野菜を作りを手伝ったこともあった。それは逆に祖父、祖母の足手まといになったが、野菜を作る仕事に没頭して、悲しい思い出を忘れようとしたのかもしれない。また、野菜畑だけではない。犬や猫がいつもそばにいた。また、飼っている鶏や豚などがいた。豊かな自然に取り囲まれて、物足りなさはあっても元気に生活していたことがわかる。

私は犬を二匹飼ったことがある。一匹は褐色で、もう一匹は黒色だった。褐色の犬は名を「お馬鹿ちゃん」といい、黒色の犬は「黒子」といった。「お馬鹿ちゃん」はじつはまったく馬鹿でなく、威風堂々として、勇氣もあり、北極村で素晴らしい犬の一匹に数えられていた。「お馬鹿ちゃん」は気性が激しく、長い鎖にずっ

と繋がれていて、家の裏の野菜畑にいた。⁽⁷⁾

かつてどこの農村でもいた子供だった。ただその心の中には「自分だけは母親から嫌われた」という不条理窮まりない思いがあつたはずだ。ただそのような考えとは別に、彼女の周りは大興安嶺の森林と大河の黒竜江が流れ、大自然の懐にくるまれていた。

大自然の親しみ深い触れあいは私に徐々に言語に興味を抱かせた。私の書く原動力は往々にそれらから与えてもらった感動だ。⁽⁸⁾

二

遅子建が北極村での生活を描写した散文は数多くある。また、小説として「北極村童話」、「原始風景 上部」などはいわば自分の北極村での生活を描いたものである。小説と散文とに細部に違いがあつても、大きな違いはみられない。小説化する必要もないほど自然が圧倒していた、といえるかもしれない。

ところで、遅子建が作家として名が知られた作品が「北極村童話」であることはよく知られている。この作品を書く以前にも『北方文学』に三作品を発表しているが、遅子建を代表する作品でまず最初に挙げられるのは「北極村童話」であろう。

この作品は一九八四年、まだ学生だった頃から書き始め、八六年の『人民文学』第二期に発表された。すでに最初の部分は引用したが、遲子建が体験したことをもとに、祖母の家に引き取られてから、帰宅するまでのあいだを叙情豊かに書き上げている。事実とはいくらか違いはあるにせよ、散文なども参考にするほとんど体験したことが書かれていると見て間違いない。

ところが、恐らくこの作品で成功したことがその後の遲子建を規定したといってもいいだろう。遲子建は北極村の事を書いて作家の名を得たが、作家としてそのあと数年、これといった作品を書けなかった。

彼女は庶民の生活を叙情豊かに書き上げる文才はあっても、ある思想を作品化するというタイプの作家ではない。おそろくなに書いていけばいいか、ということに悩んだにちがいない。遲子建が作家として自分の特徴を出す、つまり他の作家との違いを明らかにしなければ、自分は多くの作家の中で埋没し、忘れられてしまう。どんな作品世界を築いていこうか、自分が作家として自立していくにはどうすればいいか、悩み始めたはずである。

私は常々思っているが、一九八四年春の晴れた日の、あの小説創作の少女は、将来作家になろうとは特に考えていなかった。のちに人から彼女が作家として呼ばれたとき、彼女はどのような不安に駆られたか。

この不安とタイミングを一にするかのように、一九八七年北京に行き、魯迅文学院短期班に四ヶ月参加して勉強し、その年の秋、西安の西北大学での作家班に加わった。ところが二年のところで切り上げ、一九八八年、北京師範大学と魯迅文学院の合同主催の第一回の作家班に移る。この合同班が開始されるので急遽北京に移ったのかもしれないし、またあるいはなにか別の要因が働いたかもしれない。

西安では「背高のつぼの若者」が遅子建によく花束を持って訪れた。遅子建はかれとの恋に陥った。初恋だった。夜、かれのボロ自転車の上ろに乗って街を動き回った。

だが、遅子建はそれから逃れるようにして北京に移った。初恋は二年で終わった。なにがなんでも遅子建は小説家としての勉強をしたかったのであろう。無論、作家班に参加して勉強すればいい作品を書けるわけではない。ただ作家班に参加することは一種の精神安定剤になったはずである。この一連の動きに遅子建の不安が見て取れるかもしれない。

ところでこの期間、遅子建にとって有意義な時間を過ごせたのであろうか。散文など見てもそれはわからない。ただいえることは、あまり楽しい時間を過ごせなかったようだ。

なんといっても将来が不安である。激しい焦燥感に苛まれたようだ。しかし考えてみれば若手のどの作家も同じだ。他の若手の作家と同じ境遇であることが、わずかに遅子建が安心して立てる場所だった。

私は出かけるのが苦手だ。北京の二年間で、頤和園にも行かなかった。……私はときどきかんしゃくを起し、そのため友人はあまり多くない。私はしばしば自分の将来の運命に悩んだ。この地球のどの位置が自分に⁽¹⁰⁾より適しているのか分からないし、どの家に私は収まるのか、私は一切がわからなかった。

焦燥感に苛まれて時を過ごしていたが、三年半に渡る作家班の生活が終わった。作家班に参加して小説家としてなにかを掴みたいと考えた生活は終わったのである。ハルピンでの生活が遅子建を待っていた。

魯迅文学院を卒業してハルピンで仕事に就いたのは、ちょうど前世紀九十年代の初期だった。北京のあのイライラする生活環境から逃れ、ハルピンの相対的な静けさは私に格別の気持ちよさを感じさせた^①。

よほど気持ちが落ち着いたのであろう、他の散文でも同じように語られている。

魯迅文学院を卒業してハルピンに戻ったあと、私は喧噪の環境からたちまち静寂の中に戻った。その頃、たとえ創作であろうと読書であろうと、心が落ち着くのに十分だった。^②

ハルピンで遲子建に与えられた仕事は、『北方文学』雑誌社での編集であった。生活は週二回出勤するだけで、あとは読書、執筆の日々だったという。この時期、遲子建は徐々にそれまでの不安から解消され、作家としての確信を持ち始めたようだ。そして、それまでの精神的状況を作品化したのが、「白夜への旅行」^③だ。

三

「白夜への旅行」は一九九三年に書かれ、翌年の文芸雑誌『収獲』第一期に発表された。

二通の手紙から始まり、二通の手紙で終わるこの作品は、一歩間違えれば、怪奇小説になってしまう恐れがある小説である。この作品について土屋肇枝は、再生への旅路^④だという。「心の内にある孤独、自分の中の他者性と直面したのちの、再生と連帯を探る道筋として」この作品を読む。また、旅行中、自分の言葉を他人から疑われて腹

をたてていたが、旅の最後で、「私」が「精神漫遊者」つまり精神的疾患者として自己を告白したあと、「私」に変化があるからだ、ともいう。

間違ひなく「再生への旅路」に違ひない。ただ、「白夜への旅行」は、より具体的にいうとするならば、遅子建自身が作家としての再生を象徴している作品と理解するべきではなからうか。

他人から見ることのできない死んだ昔の夫馬孔多と旅を共にしたことは、「私」は「妄想」のなかで生きていることになる。馬孔多との対話は自己との対話であり、馬孔多の行動は自己が他者に期待した行動だったといえよう。誰かから作品を「批判」される生活から逃れ、出会う人と「喧嘩」し、誰かを「殺し」たかのように思い、死の危険から逃れる旅路だった。それはまさしく遅子建自身が再生するために必要な旅路だった。ではこの「妄想」はどこから出てきたのであろうか。

作品のなかで述べているように精神的な疾患からだというのは間違ひない。旅に出発する前、暑さに耐えられなくなり、さらに自分の部屋の騒音にさらされ、仕事が思うように進まず、同じグラビア誌を何度も繰りかえし見て過ごす、という異常な生活をしている、という説明のあとに次のような文がある。

この二進も三進もいかなうときにハルピンを離れられるのは、夢にまで思ったことであり、まして北方への旅に馬孔多が同行するのだからなおさらだ。

二進も三進もいかなう状態が精神的に「私」を圧迫し、「同じグラビア誌を何度も繰りかえし見て過ごす」という精神的疾患として現れていて、現在の住まいから離れることを「夢にまで思っ」ていたのであり、さらに同行者

にまだ愛情を抱いていて、関係を整理できていない馬孔多が加われば、この旅行がそのような状況を清算するには絶好の機会だったのである。

そして作品がその時々作家の精神状況を反映していると解すれば、ただこの疾患がこれまで述べてきた、遲子建自身が作家としての確信がなかったことから生じていた「妄想」と理解していいのではなからうか。「北極村童話」で作家の道を歩み始めた遲子建であったが、その「北極村」の殻から抜け出ることができないという、もがき苦しんで生じた「妄想」のなかで生きてきたといつていい。だが遲子建はついにそれを自覚した。自覚ができたということは殻を破る歩みを始めたことであり、作家としての確信が生まれてきたという裏返しでもあった。それを具現した作品が「白夜への旅行」である。

ではなぜ遲子建は作家としての確信を得たのであろうか。遲子建の年譜を見ると、この「白夜への旅行」を書いた年に、国家一級作家となっている。作家協会から認められたのである。むろんこれは外面的な出来事で、国家一級作家として認められても作品がよくなるわけではないが、外面的な出来事であるが故に、他者から自分が書いてきたことが認められたことになる。作家としての確信にならないはずがない。

遲子建自身は、翌年の一九九四年あるいはその翌年に、専業作家として生きていくことにしたと答えているが。⁽¹⁵⁾

四

遲子建は執筆旺盛な作家である。著作年表⁽¹⁶⁾を見ていくと、誰もが納得するであろう。そして一九九七年に第一回の魯迅短編賞を獲得している。自分が書いてきた道は間違っていない、という作家としての確信がさらにその後の

作品に現れている。

文芸雑誌『花城』一九九八年第一期に掲載された「観慧記」は、「白夜への旅行」と似た作品である。この「観慧記」は、作家の「私」が、夏至の日の白夜とそのときにオーロラが見られるかもしれないという予想を聞き、見物がてら故郷の北極村へ行く物語である。乗った汽車で知り合った写真家（かれは白夜とオーロラを撮るために北極村に向かう）との会話を交えて進むストーリーは「白夜への旅行」と大きなところで作品の構造が近い。ただ「私」も写真家も精神的な意味では普通人であり、作家としての確信を持つて行動しており、「白夜への旅行」のような病的な面はない。また作品は破綻もなく、スムーズに進む。読者にはあまりインパクトを与えない作品だ。ただ「白夜への旅行」よりは作家の技巧としては上であろう。同じような題材を選んで書いているが、安定してそつなく書いている、といえる。これもおそらくは作家としての確信のなせる技であろう。

「観慧記」と「白夜への旅行」を比較すると、この間の作家としての遅子建の進歩がよりはっきりする。ただ、作品を苦闘して書き上げた、という点では「白夜への旅行」だったことは間違いない。作家自身も「白夜への旅行」の方に愛おしさを覚えるようで、「白夜への旅行」の方が好きだと答えている。⁽¹⁷⁾

私が生まれたのは祖国の最北端——漠河北極村で、そこは天然の植物園のように森林と原野と河川を備えていた。私は自分がこのような美しい土地で生まれたことが嬉しかった。

私が覚えている日で一番多いのは雪の日で、冬は果てしなく続き、雪は次々と降り、天地の間はすべて白色となり、あるところの雪は夏になってもずっと解けなかった。だから北極村では古い雪が残っていた。この子供のときの生活の印象が、のちの私の創作に大きな影響を与えた。⁽¹⁸⁾

遅子建は自分の想像力の原点ともいべき北極村から不安を抱えながら出発し、ついに作家として生きていく確信を得た。それはもがき苦しみながら、ふたたび北極村に戻り、再生した道程であった。二〇〇五年一月に出版された散文集『もし魚に翼があつたら』の書名になった散文「もし魚に翼があつたら」に次のような文がある。

私は七、八歳の頃、北極村で生活をしていたが、世界は北極村のような大きさだと思っていた。大きくなつて多くの場所に行き、多くの人と会い、美しい風景に接してから、振り返つてみて考えた。世界は実際やはりあのように大きい、でもそれは小さな北極村にすぎない⁽¹⁹⁾と。

遅子建に於ける北極村は、遅子建の「世界」と変わった。このまま「北極村」をすなわち自分の世界を表現していけばいい。いいかえれば、もはや「北極村」に囚われる必要はない。好きなことを書いていける。それが遅子建の世界であり、また「北極村」である。以後、遅子建は作家としての確信の抛り所を完全に獲得したといえよう。その後の彼女の作品群がこのことを如実に示しているといえよう。

注

(1) 二〇〇七年八月、北京で、ロシアに向かわれる遅子建氏にインタビューすることができた。同席者は中央大学の渡辺新一氏。なお、蕭紅との共通点は早くから指摘されている。たとえば、川俣優「遅子建の『北極村の童話』をめぐる」(明治学院大学一般教育部付属研究所紀要、二四号。二〇〇〇年三月) などがある。

(2) 「自己を語る」「我説我」『北方的塩』江蘇文芸出版社、二〇〇六年一月。以下同) ページ二七七、一三行目。

(3) 『遅子建影記』（河北教育出版社、一九九八年九月）。なお、自伝の「雲煙過客」（『遅子建文集』4所収）は『遅子建影記』の一部を抜き書きしたものである。

(4) 「原始風景」（『遅子建』人民文学出版社、二〇〇〇年三月）

(5) 「北極村童話」（『遅子建』人民文学出版社、二〇〇〇年三月）

(6) 「寒冷の高緯度——夢の始まったところ」（『寒冷の高緯度——我的夢開始的地方』『假如魚也有翅膀』（湖南文艺出版社二〇〇五年一月。以下同）ページ二〇六、五行～一〇行。

(7) 「動物たち」（『動物們』『遅子建 散文精品賞析』学林出版社、二〇〇六年二月）ページ一八二、四行～七行。

(8) 「自己を語る」（『我説我』『北方的塩』ページ二七八、七行～八行。

(9) 「まとまりのない遙かな思い」（『遐想片断』『北方的塩』ページ一八三、二三行～二五行。

(10) 「まとまりのない遙かな思い」（『遐想片断』『北方的塩』ページ一八四、七行～八行。

(11) 「窓の中、窓の外の世界」（『窓里窓外的世界』『假如魚也有翅膀』ページ二五八、七行～八行。

(12) 「貝殻を拾う人」（『拾貝殻的人』『假如魚也有翅膀』ページ二七四、二〇行～二二行。

(13) 原題は「向着白夜旅行」。この作品のあらすじはこうだ。

ハルピンに住む「私」は二通の手紙を受け取る。一通は、読者からの批判の手紙であり、あと一通はプロポーズされている中年の男からで、離婚した馬孔多（離婚したことはあとになってわかる）が若い女性をつれてトラグの古墳の発掘場所に現れ、五日間滞在してクチャへ行った、という知らせだった。そしてテレビ画面の暖炉の火を見ていると、突然、馬孔多が入ってくる。「私」は漠河の白夜を馬孔多と一緒に見に行くことにした。

「私」は車中、馬孔多と話をするが、検札の係員には馬孔多の姿が見えない。乗換駅で食堂に入るが、やはり他の人には馬孔多の姿が見えない。

さらに塔河まで行き、そこで長距離バスに乗り換える。途中、中年の婦人が乗ってきて馬孔多の席に座ろうとする。その席の切符を見せて婦人を座らせず、馬孔多に色々言うが、周りの乗客は哀れそうに「私」を見ていた。

呼瑪に到着し、旅館で食事をして漠河行きの船に乗り換えようとしたが、船の便はすでになく車か汽車に代わっていた。しかし旅館の女将が、兄の石炭を運ぶ船に乗るように便宜を図ってくれるというので、二人分の船賃を払おうとする。すると、あなた一人だけではなかったのか、という。ところが、馬孔多が絶対船に乗りたくないというので、仕方なく、また塔河まで戻ることにあった。

塔河での夜、二人で外を歩くが雨に降られて食堂に飛び込む。その女将も馬孔多が見えず、訝しがる。食事を終えて駅に戻ると、タバコを忘れてきたことに気づいた。馬孔多が代わりに取りに行くが、なかなか戻らない。出発の時間が迫り、先ほどの食堂に行くと、馬孔多の足下に女将の死体があった。馬孔多は、彼女の夫が殺した、という。殺人事件に関わりたくない「私」は、馬孔多を引っ張って駅に行き、汽車に乗った。

西林吉駅で降り、北陞飯店で二人で泊まろうとすると、受付は馬孔多が見えないし、身分証もないからダメだという。「私」は馬孔多が見えないことを幸いに、ここに泊まることにした。翌朝、共同の友人である西陽と出会う。訝しがる彼は、馬孔多の姿は見えなかったが、あたかもいるかのように振る舞った。

六月二十一日夏至の前夜、二人は久しぶりにベッドを共にした。やがて北極村で白夜を迎えるため、観光客は一斉に出かけ、自分たちも北極村へ行った。馬孔多は西陽のグループと一緒に黒竜江の源流に向かうため、ここで二人は別れることになったが、馬孔多は死んだはずの食堂の女将と一緒に出かけるという。私は西陽のところへ行つて、馬孔多のことを頼んで塔河へ戻った。

雨の降る深夜の街を歩いて実家に帰り、ぐっすりと眠った。翌日、母親から、呼瑪から漠河行きの石炭船が沈没したこと、塔河の食堂の女将が殺されたことを聞き、驚く。

数日後、ハルピンに戻った私は、骨箱のような郵便受けから二通の手紙を受け取った。一通は、西陽からのもので、馬孔多の霊が憑いていたけど、なにも心配することはない、という文面であり、もう一通は、プロボーズされている中年男からで、トラグを出た馬孔多が六月十五日に交通事故で死んだ、ということだった。今度の旅行の切符を買ったのは、馬孔多が亡くなった翌日の十六日だった。



遅子建近影 渡辺新一氏撮影

(14) 土屋肇枝「再生への旅路——遅子建『白夜行』」（『野草』二〇〇〇年八月）

(15) 前述の会見。

(16) 土屋肇枝「遅子建履歴」（二〇〇七年九月、研究会発表）。この覚え書きを書くに当たってはこの年表など大いに利用させてもらった。

(17) 前述の会見。

(18) 「まとまりのない遙かな思い」「遐想片断」「北方的塩」ページ一八三、一行～七行。

(19) 「もし魚に翼があったら」（『假如魚也有翅膀』『假如魚也有翅膀』）ページ二〇五、一行～四行。

